

## 5 - 14 静岡および京都における重力の潮汐変化(2)

### Tidal Variation of Gravity Observed at Shizuoka and Kyoto (2)

京都大学 理学部  
Faculty of Science, Kyoto University

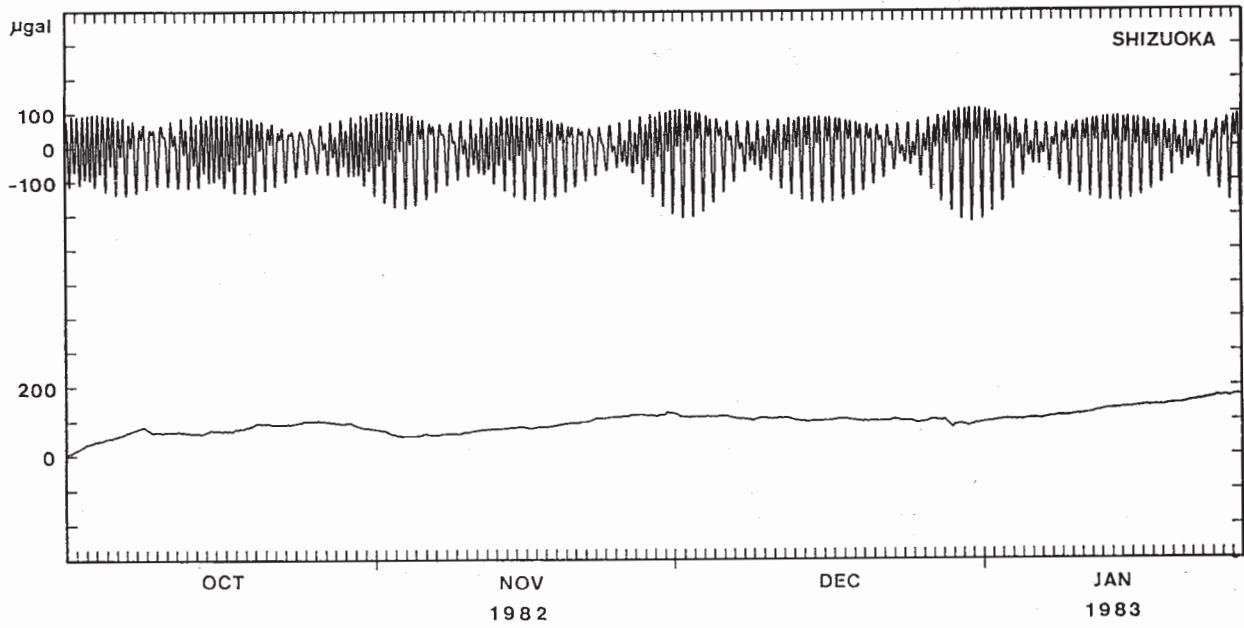
静岡地方気象台地震計室において、ラコスト重力計 D 型による地球潮汐の連続観測を、1982 年 4 月に開始した。また、京都大学理学部地球物理学教室においても、1980 年 9 月以降、アスカニア重力計 Gs - 15 型による地球潮汐の連続観測を行なっている。

これらの観測で得られたデータのうち、静岡については、1982 年 10 月 1 日～1983 年 1 月 26 日および 1982 年 12 月 28 日～1983 年 4 月 16 日、京都については、1982 年 10 月 1 日～1983 年 4 月 16 日のそれぞれの期間について解析を行なった。各期間における潮汐成分と計器のドリフトを、第 1 図、第 2 図および第 3 図に示す。また、解析期間を 30 日とし、中央時刻を 2 日ずつずらした Venedikov の方法による解析も行なった。このときの主要 4 分潮 ( $M_2$ ,  $S_2$ ,  $O_1$ , および  $K_1$ ) の  $\delta$  - factor を、第 4 図、第 5 図および第 6 図に示す。なお、これらの図中の破線は、各期間を全体として解析したときの  $\delta$  - factor を示す。

第 3 図で、アスカニア重力計のドリフトが 1982 年 10 月に大きく変化しているのは、観測室の空調を運転したことの影響であり、第 6 図で、 $O_1$  および  $K_1$  分潮の  $\delta$  - factor の変動が激しいのは、長年月の連続観測によって、アスカニア重力計が不調になりつつあるためである。

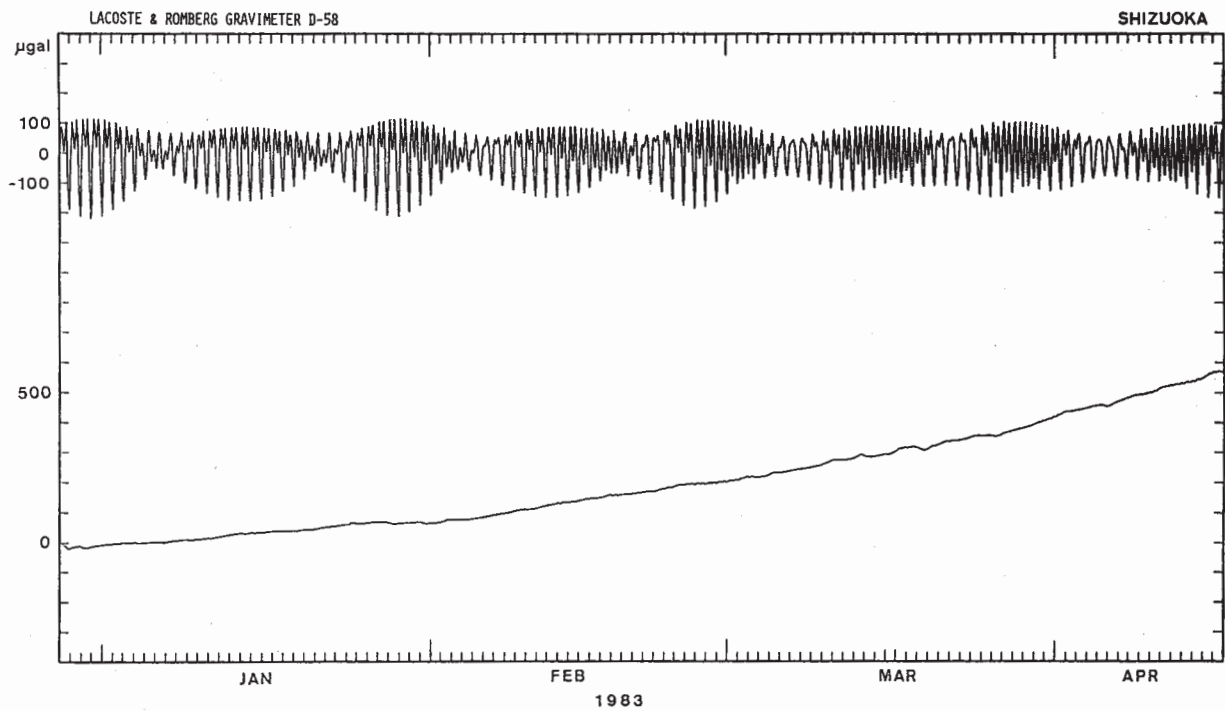
解析結果から判断すると、振幅が最大で、かつ、最も信頼できると考えられる  $M_2$  分潮の  $\delta$  - factor は、1982 年 10 月～1983 年 3 月においては、静岡および京都の 2 地点ともに、とくに有意な変化はなかったと考えられる。

( 中川一郎・塚本博則 )



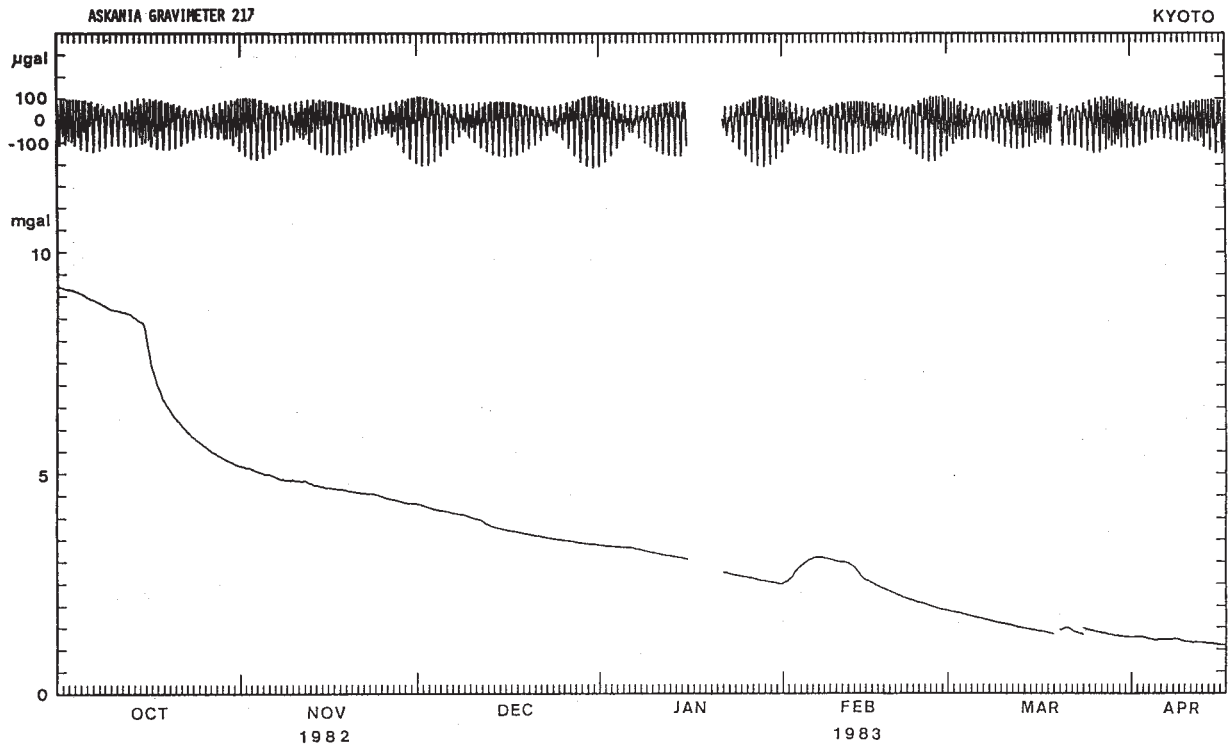
第1図 静岡での1982年10月～1983年1月における潮汐成分と計器のドリフト

Fig. 1 Tidal component and instrumental drift during the period of October 1982 - January 1983 at Shizuoka.



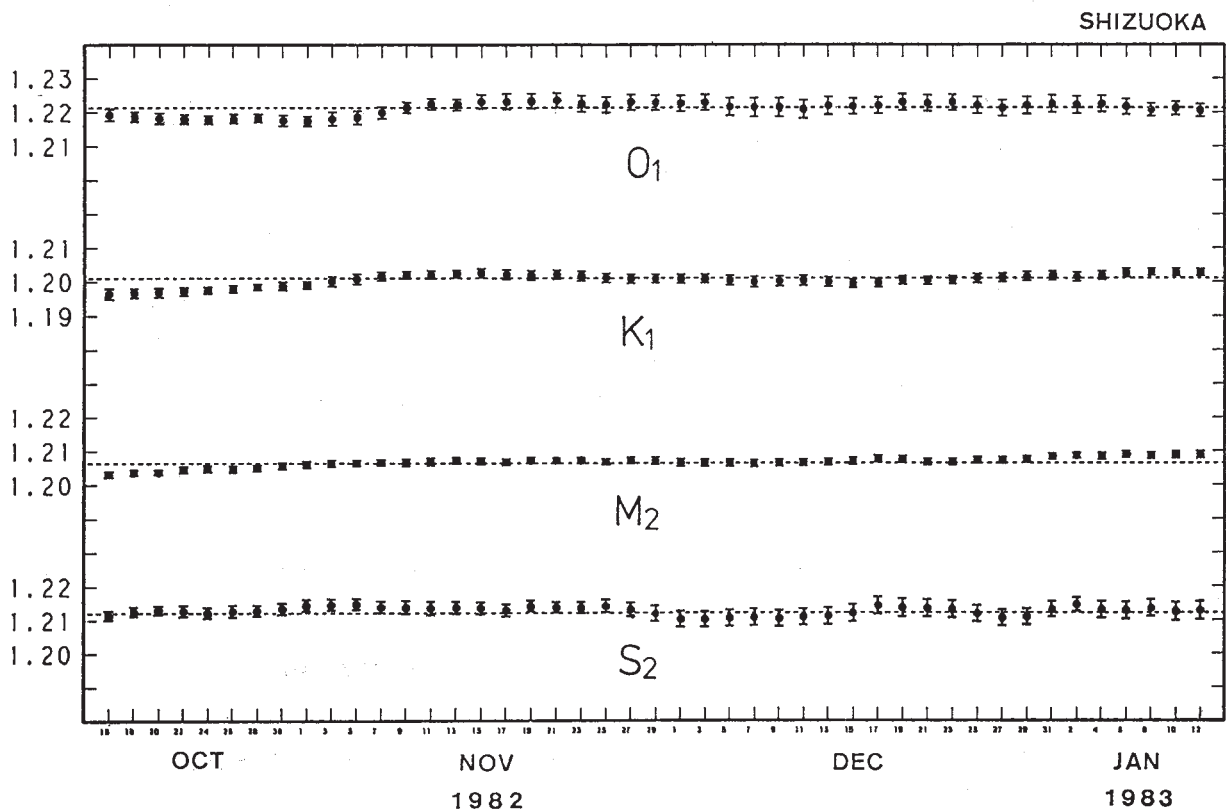
第2図 静岡での1983年1月～4月における潮汐成分と計器のドリフト

Fig. 2 Tidal component and instrumental drift during the period of January - April 1983 at Shizuoka.



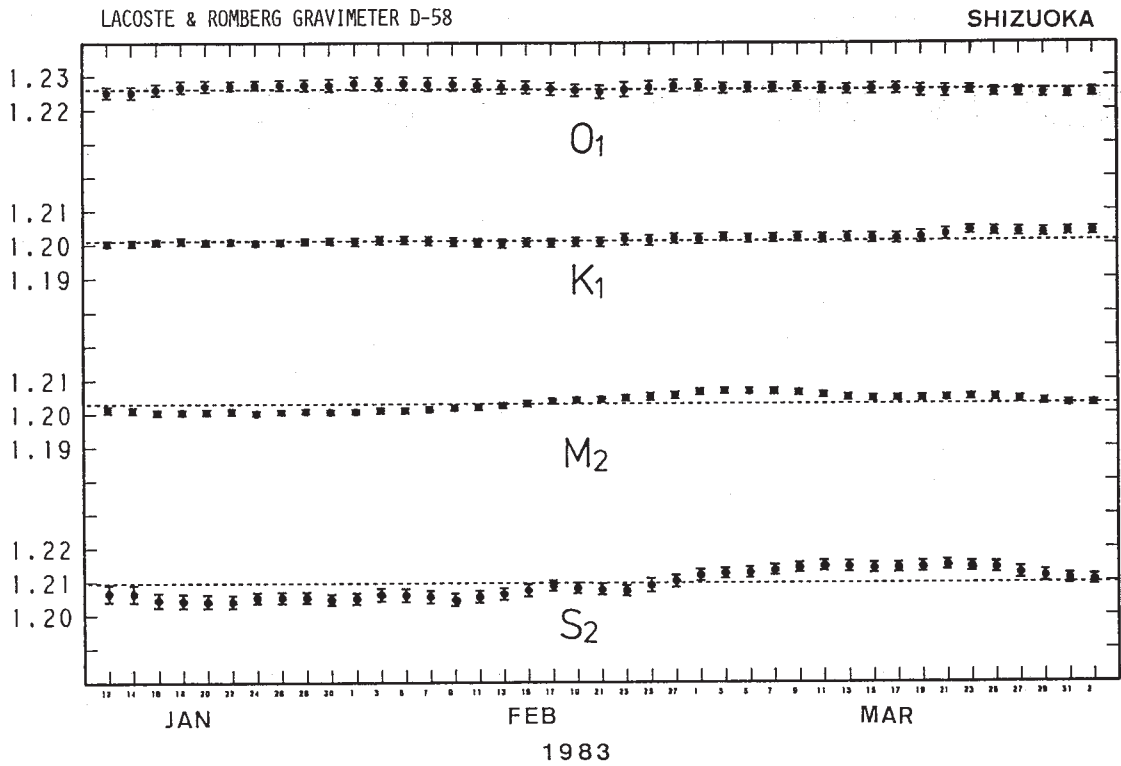
第3図 京都での1982年10月～1983年4月における潮汐成分と計器のドリフト

Fig. 3 Tidal component and instrumental drift during the period of October 1982 - April 1983 at Kyoto.



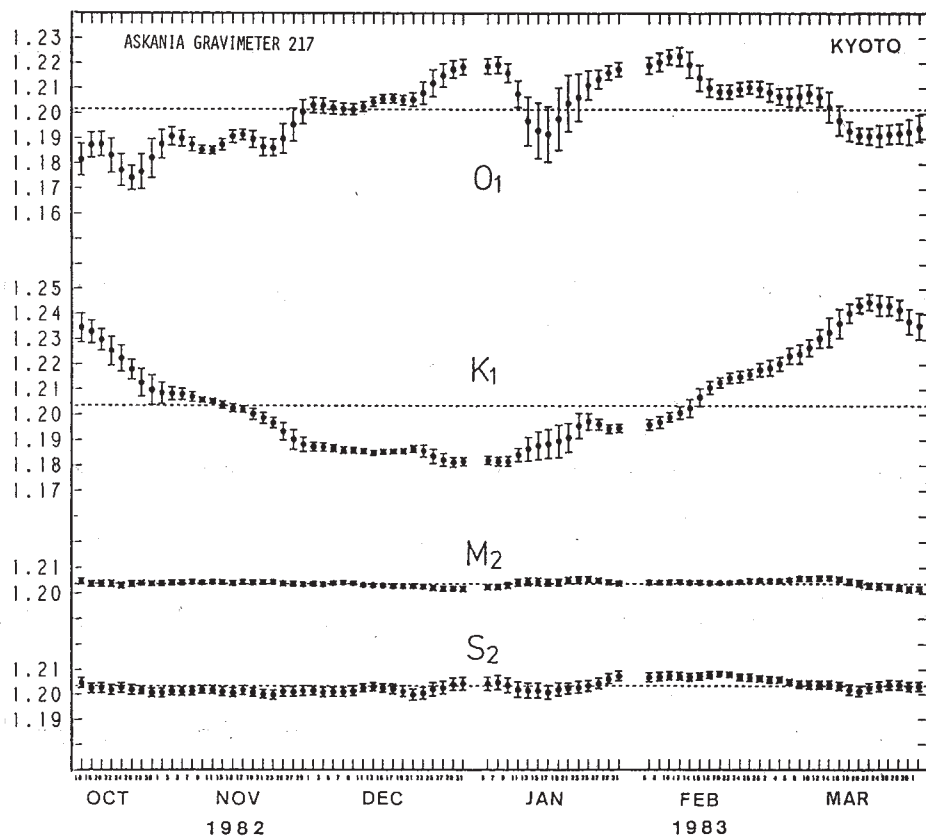
第4図 静岡での主要4分潮の $\delta$ -factor (1982年10月～1983年1月)

Fig. 4  $\delta$ -factor for the 4 principal tidal constituents at Shizuoka (October 1982 - January 1983).



第5図 静岡での主要4分潮の $\delta$ -factor (1983年1月~3月)

Fig. 5  $\delta$ -factor for the 4 principal tidal constituents at Shizuoka (January - March 1983).



第6図 京都での主要4分潮の $\delta$ -factor (1982年10月~1983年3月)

Fig. 6  $\delta$ -factor for the 4 principal tidal constituents at Kyoto (October 1982 - March 1983).